

* 答はすべて解答用紙に書きなさい。

* 句読点・記号も字数に数えます。

* 本文は出題の都合上、一部変更しています。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

立石美奈は六年生。父が一年間、山奥の高校で臨時教員をすることになった。出張の多い母は東京に残り、美奈は父について峯川村に越してきた。デンさん(明野伝造)の工房に通って木工を少しずつ学んでいる。高田麻衣、川越優美は同級生。紀香(亀山紀香)は担任の先生。

音楽会が近づいてくる。わたしのア、弾く木琴は、へこへこ芯のない音をたてている。それでも、a 三度に一度はタイミングが合うようになった。練習のあと、同じ方向の麻衣といっしょに帰るようになった。こいつはクラス一のおしゃべり娘だから、こつちがしゃべらなくていいので楽だ。

「立石さんって、ほんとにおとなしいよね」

「おまえがしゃべりすぎなんだ、と思うが、b イ黙っている。」

「1 東京から来たって、信じられないよ」

一学期にもいわれたぞ。あの時は、内心ムツとした。でも、2 今は不思議と少しも腹が立たない。

「ぜんぜん違うんでしょ、c こことは」

「人の数がね」

「だよねえ。c だんだん人が減ってくし。いとこもね、東京に行っちゃった」

「高田さんは、d ここにいるの？」

「さあ。高校はM市かな。やつぱさ、銀高(Ⅱ美奈の父が勤める銀の星高校)には行く気にならない。高校はバスとかで通いたい。で、高校出たら、峯川を出ることになるんだろうな。大学も専門学校も、通えるところにはないし。就職だって、この近くじゃ、優美んちぐらいだし。優美はいいよね。跡継ぎだから、何の心配もいらないんだ」

それが優美にとっていいのかは疑問だけど、とりあえずうなづく。

「川越さんて、昔からジャージで登校しているの？」

「去年からだよ。前はふつうだった。っていうか、低学年のころはさ、一人でお嬢さまみたいなかつこうしてて、でもそのころって、まだうちらもガキで遠慮とかないから、みんなで、川越さんの服は変です、なんていったりしちゃったけど」麻衣はくふつと笑った。

「家でもジャージなのかな」と聞いてみる。実はそうじゃないことはわかっていただけれど。

「さあ。優美ってさ、うちのこととか、あんまり話さないんだよね。でも、学芸会とか音楽会とか、行事がある時には、決めてくるよ。だからそういう時に、お嬢さまなんだなって、思い直すの。特別な子って感じ。どこにいても目立つし、しっかりしてるし、頭もいいし、レベルが違うんだ。きつとさあ、大学なんかは、レベルの高いお嬢さま学校とかで、それから名士のツマか何かになるんだろうな。でさあ、うちら、今は、優美、なんて呼んでるけど、大人になったら、川越の奥さま、なんて呼ぶんだよ、それで選挙……」と、麻衣の想像がふくらんでいくのを、わたしは珍しくさげすんだ。

「川越さんの家って大きいよね。行ったこととか、ある？」

「そりゃあ、あるよ。この村で行ったことない人はいないんじゃないかな。うちだって川越林業の社員ってわけじゃないけど、でも、野菜とか① シュツカするの、優美の家の会社が関係するから、正月とか② 埃摺に行くし。川越家に縁のない人間なんて、峯川にはいないと思うよ」

川越林業はほかに③ ケイレツ会社を持っている。④ ケンチク会社に

運送会社等々。その元締めが、優美のじいさんってわけだ。麻衣の家は、おやじさんは隣町まで働きに行っているが、たしかおふくろさんとじいさんとはあさんは農家だから、それでお世話になっているのだという。

「あ、立石さんは、優美とはしがらみないもんね」しがらみなんていった自分の言葉が、おかしかったのか、麻衣はまた、3 くふつと笑った。

「お嬢さまの部屋ってすごいのか？」

「え？ 優美の部屋までは入ったことないよ。お⑤ タンジヨウ日会やった時だって、大広間だったし」

「おーひろまー？」思わず声がうわずった。ふつう、そんなものは家がないだろうに。まあ、あれだけ廊下も長かったから、大広間の一つや二つあっても、不思議はないのかもしれない。

「今年もたぶん、一月に優美のタンジヨウ日会やると思うから、きっと見られるよ。クラス全員ご招待だから」

4 わたしは、優美のことがさっぱりわからなくなっていた。教室での優美は、クラスのリーダーで、だけど、別にA けむたがられてもいないし、ほかの子たちとも仲がいい。親しいといえない女子は、わたしぐら

いだろう。だけど、麻衣は優美の部屋には入ったことがないという。なぜ、わたしを部屋に入れたのかといえば、※ 秘密のブツの受け渡しがあったからだ。つまり、わたしは優美の秘密をオ 握ったのだ。なりたいの、一番星。最初に聞いた時は、なんじゃそりや、と思ったけれど少し考えればわかる。優美がなりたいののは、女優だと思ふ。なぜ、優美が女優になりたいと思うのか。美少女オーディションに応募しようと思っているだけなら、モデルかもしれないし、たんにアイドルに憧れているだけの可能性もある。でも、優美は、演じていると思った。代表委員も、家のお嬢さまも。

「高田さん、将来の夢とか、あるの？」

「あたし？ O L かな。都会のきれいなオフィスとかで働いてみたいよ。じゃあね」

わたしはじゃあねと同じ言葉を返して、手首の先だけでてれれと手を振った。O L とはキャピキャピな麻衣に似つかわしくないリアルな答えで、それを夢というのかは疑問だが、人はわからないものだと思った。

音楽会の前日、明野工房に行くと、デンさんが、「これやる」といって、小さなものをてのひらにのつけてくれた。それは、カ 木彫りのブローチで、木琴をかたどったものだった。ちゃんと半音付きの茶色の木琴、バチまでそえられている。

「すごい！ 何でこんな細かく彫れるの？」

わたしの叫びに、「デンさんは、ワッハッハと笑った。

「5 そうきたか、美奈らしいな」

「あたしらしい？」

「ふつうは、かわいい！ とかいわないか？ せめて、ありがとう！ とか」「そう思ってるよ」ちよつとぶつきらぼうにいった。本当にそのブローチはすごくかわいくて、わたしはとてもとてもうれしかったのだ。けどやつぱり、そのみごとにできばえにキ 感嘆するほうが先だったのだ。「それ、美奈が切った木だよ」

あつ、と思った。電動糸ノコで切ったいろんな形。台形のものを選んで、デンさんは「くれ」といった。喜んであげた。でも、何であんな変な形と思ったつけ。6 あの時から、あの木は、木琴ブローチになることが決まっていたのだ！

「これ、つけて、音楽会行く」

「ああ、がんばれよ」

連合音楽会の日が来た。場所は隣町にある公会堂だ。だれもがよそゆきのかつこうをしている。麻衣はピンクのワンピース。わたしはタータンチェックのスカートに白いブラウス。水色のカーディガンをはおっている。ブラウスの胸元に、デンさん作の木琴ブローチをつけた。

そして優美は、ある意味地味な紺のツーピースを着て、髪は紺のリボンで結んでいるだけだった。それなのに、ぱつと目立つ。これがお嬢さまオーラというものだろう。

連合音楽会の参加校は近隣の六校だった。といっても隣の学校までは、一山越えなくてはならない。公会堂はほぼ満席だった。その中の⑤ イツカク、何だか光が当たっているような感じがするとすると、そこに優美がいた。ぼんやりと会場を眺めているうちに、出番が近づいてきた。ぞろぞろと舞台⑥ ウラへ向かう。

「立石さん、すごく落ちついてるね」と、麻衣が声をかけてきた。

「えっ？」

「あたし、緊張して手が震えそう。どうしよう、どうしよう、失敗しちゃうたら、わかるかなあ」

麻衣はアコディオンだ。失敗したって目立たないだろう。現実には失敗する可能性があるのも、失敗したら目立つのも、わたしのほうだ。

「緊張してないというの、ああいうのをいうと思う」

わたしはあごで、優美を示す。

「ああ、優美は特別だよ。場慣れしてるもん」

うわさされてることに気づいたのか、優美がこつちを見た。

「立石さん、あそこ、気をつけてよ」

自信がなかった。まだまだ、遅れずに弾ける確率は五割を切っている。

「へい」

まわりが一斉に吹いた。「はい」といったつもりだったのだ。

「何、『へい』って」

緊張するよ、といっていた麻衣が⑦ ナミダを浮かべて笑っている。

「もう、ミラクってさあ、けつこうおかしんだから」

「さあ、出番よ」紀香が B すつとんきような声でいった。いちばん緊張してるのは、こいつかもしれない。

舞台に立った。胸がどきどきする。手が小刻みに震えていた。左手で右手をむりやり押さえた。木琴の立ち位置は後ろ。それだけが⑧ スクいだ。やがて幕が静かに開く。7 ブラウスにつけた木琴ブローチにそつと指で触れた。落ちつけ、美奈。デンさんの声が聞こえたような気がした。

紀香が指揮棒を構える。ピアノのほうを向いて合図する。あとは何が何だかわからなかった。気がついたら、終わっていた。自分がちゃんと弾けたのかどうかもわからなかった。一生懸命、ずれないように遅れないように、バチを動かした、ような気がする。だけど……。

——デンさん、落ちつけなかったよ……。
舞台の袖に退く。優美が、怖い顔で近寄ってくる。やつちまったのだからか。

「立石さん！」

「はい」今度は「へい」といわずにすんだ。

「やればできるじゃない」

「へっ？ 失敗しなかったの？」

優美が笑った。いやみのない笑顔で。

「その木琴ブローチ、いいね」

わたしは、あらためて自分の胸元を見る。またそつと触れる。

「明野さんにもらった」

「それって、ぜいたくなんだよ。明野さん、けっこう有名な木工芸家なんだから。それに、世界にたった一つなんだから。立石さんのためのブローチ」

「そっか」そうだよな。ぜいたくだよな。これがあつたから、うまく弾けたのかな。ありがとう、デンさん……。

紀香がにこにこしながらいった。「すぐよかったよお」

「立石さんの『e』のおかげだよ。緊張が解けたから」

健人が笑った。ほんとほんと、と声が上がると。笑い声に包まれる。何だか不思議な気分だった。ずつといつしよに練習してきたんだなと思つた。だから、⁸ わたしもいつしよになつて笑つた。でも、ちよつとだけ泣きたくなつた。

家にもどるとオフクロがいた。

「⁹ 来てたの？」と聞いたけど、本当は気がついてた。東京からやってきたキャリアウーマンは、やつぱりちよつとだけ目立っていたから。

「だって、美楽がシロフオン弾くって、お父さん、はしやいじやつて」

久しぶりに、オフクロが作ったご飯を食べた。おいしかった。オヤジもまあがんばっているが、やつぱり年季が入っているので、違う。そういうと、オフクロが笑った。「あと五か月ががんばってね」

しばらく会ってないと、やさしい。だって、前はスナック菓子を買ってくるとしどい顔をするオフクロが、じやがりこをたくさん持つてきてくれたのだから。サラダ味は、デンさんと食べよう。

次の日、オフクロといつしよに、明野工房に行った。樹木に囲まれた道を並んで歩いたけれど、いいわね、空気がおいしい、風がさわやか、空が高い、と、うるさい。なんののかんといつても、オヤジと同じようなことをいうのだなあと、妙に感心した。

デンさんは庭にいた。

「立石美楽の母です。いつも美楽がご迷惑をおかけして……」

デンさんは、何の何のと、表情と身振りだけで表現する。わたしは、みやげだといって、じやがりこを渡した。

「お、サラダ味だな」デンさんが目を輝かせた。わたしは今日も胸につけていた木琴ブローチを、手で示した。

「これ、ほめられた。あの川越家の跡取り娘に」

「そうか」と、デンさんは笑い、それからぼつりといった。

「作ってみるか」

「うん、やつてみる」すぐにうなずいた。タメで話すわたしに、オフクロが少しいらしているのがわかった。でも、デンさんはにこやかにいった。

「いつもいつしよに楽しく遊んでます」

「あらまあ……」といったとき、言葉を続けられずに、オフクロはわたしとデンさんを見つめている。

「じやがりこ友だちだもん、おれたち」

「うん」

帰り道、オフクロがいった。

「美楽が、二学期から東京にもどるっていつた時、それもしかたないかなと思つてたの。東京しか知らないんだものね、あんたは。ここじゃあ、わたしもいつしよにいてあげられないし。しばらく、わたしもおばあちゃんのところと同居させてもらおうかな、とも考えた」

東京にもどるっていつた時は何もいかなかったけれど、そんなこと考

えてたのか。オフクロはにやつと笑つてまた口を開いた。「でも¹⁰ あれ

ね、美楽がここにとどまったわけは」オフクロはオヤジより鋭かった。

オフクロはその日の午後、東京にもどつていった。

「何かさあ、最近のミラクって……」と、いきなり麻衣がいった。気が

つくとクラスの女子がわたしを呼ぶ時、「立石さん」の間に「ミラク」

が交じるようになった。そして、わたしは女子の何人かを、名前で呼ぶようになっていた。いつからだか、^ケ記憶にない。たぶん音楽会の前後からだろう。

「何だよ、麻衣、最近のあたしがどうしたつていうの？」

「峯川の景色にとけ込んでいるつていうか、このまま、ずつといつしよに、峯中に行くみたいな気がしちゃう」

「前は違つたんだ」

「うん、お客さまつて感じかなあ。うちらだつて、ミラクは、東京に帰るつて思つていたから。そのわりには東京から来たつて感じじゃないつてことはあつたけど、やつぱり、峯川っ子、つていうのとは違つたよね。だけど最近さあ、何か自然だよなあ、ここにいて。でも、中学、いつしよじゃないんだよね」

麻衣の表情がちよつと寂しそうで、わたしは¹¹ 少しうろたえて、だ

けど何となくこそばゆくて、ほんのりとうれしかったのだ。

わたしが「立石さん」ときどき「ミラク」に変わったころ、優美の視線がやわらかくなつた。その優美が、紀香と話している。優美は少しうれしそうに笑っている。ははん、運試しがうまくいったのか、と思つて

みていると、ちよつと来いというふうにあごをしゃくつた。やつぱりこいつには逆らえない。気が小さいと自分でも思う。廊下の隅で、優美が小さな声でいった。「¹² あのこと、だれにもいつてない？」

こくりとうなずく。

「書類選考、通つたの」

「そりやあ、通るでしょうよ」あんたが通らないで、だれが通る？

「そうかな。でも、ここまで。親に認められるわけないから、面接には

行かない。行けっこないし」

「ほんととは行きたかつたんだ」

「別に。美少女つていわれたつてしょうがない。あたしが望んでいるのは、そんなことじゃないし」

「……星だもんね」

「えっ？」

「女優になりたいと思つているのかなつて」

優美の眉がキツと一センチぐらい上がり、顔がぐつと近づいてきた。そしてわたしの腕を思いきりつかむと、怖い顔でいった。

「そんなこと、人にいつたら^⑨ ショウチないからね」

「わかつてる」

優美はようやくわたしの腕から手を離れた。痛いぞ、ばか力め。

「……何で、そう思つたの？」

「わたしを感じてること、口にしたら怒るかな。でも、いつてみた。

¹³ 演じてるじゃん、教室でも、家でも」

優美はCまじまじとわたしを見た。それから、ふつと口をゆがめて笑つた。「いいよね、東京に帰れるあんたは」

「へっ？」

「ほんと、にくらしいつたらない」

「……わたしのこと？ だよな。ほかにはいない。だけど、そいつは筋違いつてもんだらう。」

「上から押しつけるものも、足かせもない。ある日、ふらつとやつてきて、当たり前みたいなのに、春が来たら東京にもどつていく」

「そういわれても困る。けど、わたしは黙つて優美を見つめる。また優美が口を開く。「うんざり。ときどき、何もかも投げ出したくなる。山もスギ林も、見るのもイヤ！」

けど、見ないわけにはいかないぞ。ずつと目をつぶっていることはできない。目を開ければどうしたつて山が視界に入ってくるのが峯川だ。

「わかる？ わかんないよね。峯川なんて、どこもかしこも息苦しい。狭くて」

「練馬より広い」

「面積じゃないでしよ。みんな出て行く。出ていける人はいない。でもわかる？ あたしは跡取りなの。川越林業の。出ていく自由なんてないの」

「ようやくわかつた。一学期から、何でこいつにいびられたか。大発見だ。こんな何もかも恵まれているお嬢さまに比べたら、とりたてて取り

えもないわたしが嫉妬されることもあるんだ。ただ、東京にもどれるというだけ。だけど、何でだろう。コ無性に腹が立つた。川越林業あつての川越優美だともいうのだろうか、これほど^⑩ エラそうに振る舞う

のが？ そんなはずはない。

「別に、家を背負うこともないだろうに。カタツムリでもあるまいし。川越優美は川越優美なんだから」いつてから、まずい、と思つた。優美が口を開く前に、思わず後ずさりする。でも、優美は、ブツと吹いた。

「やつぱ、あんたつて変」

※ 秘密のブツ……美少女オーディションの応募用紙。美楽が担任の紀

香先生から頼まれて、優美の家に届けたもの。

(濱野京子『木工少女』講談社より)

※ 秘密のブツ……美少女オーディションの応募用紙。美楽が担任の紀

香先生から頼まれて、優美の家に届けたもの。

(濱野京子『木工少女』講談社より)

※ 秘密のブツ……美少女オーディションの応募用紙。美楽が担任の紀

香先生から頼まれて、優美の家に届けたもの。

(濱野京子『木工少女』講談社より)

※ 秘密のブツ……美少女オーディションの応募用紙。美楽が担任の紀

香先生から頼まれて、優美の家に届けたもの。

(濱野京子『木工少女』講談社より)

※ 秘密のブツ……美少女オーディションの応募用紙。美楽が担任の紀

香先生から頼まれて、優美の家に届けたもの。

(濱野京子『木工少女』講談社より)

※ 秘密のブツ……美少女オーディションの応募用紙。美楽が担任の紀

香先生から頼まれて、優美の家に届けたもの。

(濱野京子『木工少女』講談社より)

※ 秘密のブツ……美少女オーディションの応募用紙。美楽が担任の紀

香先生から頼まれて、優美の家に届けたもの。

(濱野京子『木工少女』講談社より)

※ 秘密のブツ……美少女オーディションの応募用紙。美楽が担任の紀

香先生から頼まれて、優美の家に届けたもの。

(濱野京子『木工少女』講談社より)

問1 アゝコ の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問2 ①⑩ のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問3 a s d に次のアゝエをあてはめ、記号で答えなさい。

ア ずつと イ やつぱり ウ もちろん エ ようやく

問4 1 「東京から来たって、信じられないよ」と麻衣が言う理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 東京の子どもは、もつとあかぬけていると思っていたから。
イ 東京の子どもは、テレビで見るようなおしゃべりな人ばかりだと思っていたから。
ウ 東京では人も多く競争が激しいため、みんな積極的だと思っていたから。

エ 東京の子どもは、活発なもののおじしな思っていたから。

問5 2 「今は不思議と少しも腹が立たない」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 同じことを何度も言われてきたので、慣れてしまったから。
イ 東京を離れてみると、自分でもその通りだと実感し始めたから。
ウ 峯川の生活にも慣れ、麻衣に悪気がないのもわかってきたから。
エ 峯川に住む人にとって東京は憧れの場所だとわかってきたから。

問6 3 「くふつと笑った」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いつも親が使う言葉を意味がよくわからないままに使ってしまい、おかしく思ったから。
イ 大人のことを話題にしたため子どもなら使わない言葉を使ってしまった、おかしく思ったから。
ウ 美楽が真剣に聞いているので調子に乗って、いろいろ話した自分がおかしくなったから。
エ 子どもの自分たちに関係ない大人の話で盛り上がってしまったから。

問7 4 「わたしは、優美のことがさっぱりわからなくなっていた」とありますが、優美のどのような行いがわからないというのですか。解答らんにあうように三十字以上四十字以内で答えなさい。

問8 AゝC の意味として最も適当なものを、それぞれ次のアゝエから選び、記号で答えなさい。

A 「けむたがられて」
ア 気まぐれであつかいにくいと思われて
イ 暗い感じなので話もしたくないと思われて
ウ 親しめず近づきにくいと思われて
エ 自慢ばかりしていつしよにいたくないと思われて

B 「すつとんきような声」
ア いきなりで調子外れな声 イ 大きくてよく通る声
ウ 小さくて消え入りそうな声 エ かん高い悲鳴のような声

C 「まじまじと」
ア 上目づかいで イ にらみつけるように
ウ おそるおそる エ 真正面からじつと

問9 5 「そうきたか、美楽らしいな」とありますが、デンさんはどのような点を「美楽らしい」と言ったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 何よりもまずブローチの細工の細かさに気づいて感激する点。
イ 「かわいい！」と言って喜ぶような子どもらしさがない点。
ウ どんなにうれしいと思っても感謝の気持ちを表せない点。
エ 自分で切った木から生まれたブローチを特別だと思う点。

問10 6 「あの時から、あの木は、木琴ブローチになることが決まっていたのだ」とありますが、ここから読み取れる美楽の心情として、適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 期待 イ 感動 ウ 共感 エ 憧れ
オ 驚き カ 恥じらい

問11 7 「ブラウスにつけた木琴ブローチにそつと指で触れた」とありますが、美楽にとってこのブローチはどのような意味を持つものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア だれよりもうまく演奏させてくれるお守りになるもの。
イ 特にかわいらしさを演出してくれるもの。
ウ これまでの練習の苦勞を思い出させてくれるもの。
エ デンさんのかわりに励ましてくれるもの。

問12 e にあてはまる語を本文から二字でぬきだしなさい。

問13 8 「わたしもいつしよになつて笑った。でも、ちよつとだけ泣きたくなつた」とありますが、この時の美楽の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 美楽に笑ってはいるが、自分の努力が正しく評価されていないという不満。
イ みんなに木琴の演奏をほめてもらったのに、緊張して自分ではわからなかったくやしき。
ウ 木琴の演奏がうまくいき、合奏が成功したうれしさと、苦勞が報われたという思い。
エ 厳しい顔の優美から「やればできるじゃない」とほめられたことに對する照れくささ。

問14 9 「来てたの」とありますが、美楽がこのような聞き方をした理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分を放つて仕事に生きている母には来てほしくなかったから。来てくれたことを素直に喜ぶのが何となく照れくさかったから。
ウ 会場でかなり目立っていたと知らせるのも気の毒だったから。
エ 母に来てほしいという思いを絶対に知られたくなかったから。

問15 10 「あれ」とは何のことですか。適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア デンさんがいろいろなものを作ってくれること。
イ スナック菓子自由に食べられること。
ウ デンさんが好き放題をさせてくれること。
エ デンさんが対等の立場で美樂を受け入れてくれること。
オ 明野工房がすばらしい自然環境にあること。
カ デンさんといつしよに木工細工ができること。

問16 11 「少しうろたえて、だけど何となくそばゆくて、ほんのりとうれしかった」とありますが、この時の美樂の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 東京人らしくないとまた言われ、今の自分と違ふととまどったが、麻衣がはつきり言ってくれたことに感謝している。
イ 寂しそうな麻衣にどう言つてよいか困つたが、友人として受け入れられたことを感じて喜んでる。
ウ 言つても仕方がないことを指摘され、とまどつたが、ここに自然になじんだと言われてほつとしてる。
エ 自分が今置かれている立場を突きつけられて困つたが、麻衣が自分に同情してくれたことをありがたく思っている。

問17 12 「あのこと」とはどういうことですか。解答らんにあうように、十五字以上二十字以内で答えなさい。

問18 13 「演じてるじゃん、教室でも、家でも」とありますが、優美は「教室」「家」で何を演じているというのですか。それぞれ本文から五字以内でぬきだしなさい。

問19 14 「ほんと、にくらしいつたらない」とありますが、なぜ優美はこのような発言をしたのですか。優美と美樂の違いがわかるように三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

問20 本文の特徴を説明した次の文章の空らんにあてはまる語を答えなさい。①は漢字三字、②は漢字二字で書き、③・④は後のアゝカから選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度使つてはいけません。

語り手が①であることにより、読者が①の気持ちに寄りそいやすくなっている。また、②文が多いため③デンボが生まれ、④表現が多用されることで、①の体験が生き生きと描かれている。

ア 規則的な イ くだけた ウ たどたどしい
エ 格調高い オ 軽快な カ ゆつたりした

カ		ア	
木彫り	り	弾く	く
キ		イ	
感嘆		黙って	って
ク		ウ	
怖	い	遠慮	
ケ		エ	
記憶		挨拶	
コ		オ	
無性		握った	った

⑥		①	
	ウラ		シュツカ
⑦		②	
	ナミダ		ケイレツ
⑧		③	
	スク		ケンチク
い	い		
⑨		④	
	ショウチ		タンジヨウ
⑩		⑤	
そう	エラ		イツカク

a
b
c
d

問 4
問 5
問 6

問 7
行い。

問 8
A
B
C

問 9
問 10
問 11

問 12
問 13
問 14

問 15
問 16

問 17
い。

問 18
教室
家

問 19

問 20
①
②
③
④

受験番号